

JFA 第 42 回全日本 U-12 サッカー選手権大会視察レポート

報告者：鈴木 崇記（袋井市立袋井中学校）

■目的

選手育成の視点で静岡県が全国で勝つための課題を分析、明確化する

■分析対象（中心に観た試合）

グループ G

第 1 節 キューズ FC・エスパルス vs FC アスルクラロ高知（高知県） 3 - 0 ○

第 2 節 キューズ FC・エスパルス vs ファナティコス（群馬県） 2 - 0 ○

第 3 節 キューズ FC・エスパルス vs YF 奈良テソロ（奈良県） 1 - 1 △

ラウンド 16

キューズ FC・エスパルス vs 大阪市ジュネッス FC（大阪府） 2 - 2

(PK 2 - 3) ●

準々決勝 4 試合・準決勝 2 試合

決勝 川崎フロンターレ（神奈川県） vs 大阪市ジュネッス FC（大阪府） 2 - 2

(PK 4 - 3)

■報告対象者

コーチングスクールおよび育成に携わる指導者

■流れおよび全体像

- ・ 12 月 26 日（グループリーグ）から 12 月 29 日（決勝）の 4 日間の日程で行われた。
- ・ 40 分ゲーム（20 分×2） ※ラウンド 16 以降は PK（3 人）により勝敗を決する。
※準決勝・決勝は 10 分間の延長戦を行い、決しない場合は PK により勝敗を決する。
- ・ 競技者数 8 名、交代要員数 8 名以内、交代制限なし。
※交代した選手が再び出場することができる。

■課題の発見と分析

【攻撃】

○ゴールに向かってプレーすることの重要性

パスを繋いでピッチの横幅をうまく使ってプレーできるチームが多かった。その中でも縦方向（前へ）へゴールに向かってプレーできるチームが勝ち進んでいた。バイタルエリアでの崩しのイメージやカウンターでの崩しのアイディア、サイドからのクロスに対してシュートが打てる場所に良いタイミングで入ってくるなど、点をとるためのプレーがチームとして個人として整理されているチームが強いと感じた。

○「頭（判断）」と「技術（止める・蹴る・運ぶ）」と「身体」の速さの重要性

「頭（判断）」の速さは、相手よりも先を見られるかであると感じる。ゴールを目指すためにボールがくる前に状況を把握し、イメージをもってポジションをとり、ダイレクト

の選択肢をもってプレーしているかが大切であると感じた。相手より先を考え常に優位な状態でプレーすることが得点に繋がる。そのためには、チームとしてどうやって点をとるかという共通認識（型）が必要であると感じる。チームとしてやりたいことを理解したうえで、場面での個人のアイデア・判断を鍛えていくことが大切だと感じた。

「技術（止める・蹴る・運ぶ）」の速さは、自分が考えたようにボールが扱えるということである。次のプレーのイメージを持ちながら相手がいる中で、思い通りにボールが扱える選手は、ピッチの中でとても輝いていた。

「身体」の速さは、ただ速く走るだけではなく、自分の思うように身体を操ることができるとのことである。相手を抜き去ったり、相手に対応したりする際に、良い姿勢でプレーしている選手が多くみられた。身体の使い方をこの年代でしっかり指導すれば無理のないしなやかな動きを手に入れ、後にパワーをつけて更にレベルアップできるのではないかと感じた。

【守備】…3つのポイント

○ゴールを背にして守る。正しいポジションから正しいタイミングで奪いにいく。連動

ボールを奪うために、ボール保持者の状況と味方や相手の状況を見てポジションをとり、自分のタイミングでボールに積極的にチャレンジしている場面を多く目にした。自分で正しいポジションをとり、自分でスタートが切れることが大切だと感じる。その上に複数人で（チーム全体で）連動して、ゴール中心の守備とボール中心の守備ができるようにしていくことで、相手の脅威となる守備が作りあげられるのではないかと感じた。

■キューズのサッカー

キューズFC・エスパルスは、サイドからのアーリークロスや中央突破で相手センターバックの背後をつく攻撃をおこなっていた。ボランチの3番から効果的なスルーパスや突破が見られ、9番のスピードとテクニックを活かした突破、10番のテクニックを活かしたプレーで得点を重ねていた。守備面では、センターバックの4番を中心に両サイドバックの2番、13番が連動して粘り強さを見せていた。ほとんどゴール方向にシュートを飛ばさせなかった。失点の場面は、DFライン背後に出されたボールを見てしまったこと、GKのハイボールの処理とセカンドボールに対するケアの意識が原因であった。

■総括

サッカーの原理原則を突き詰め、特徴あるチーム作りをすることが大切であると感じた。チームとしての点のとり方、ボールの運び方、ゴールの守り方、ボールの奪い方を明確にし、その中で選手が工夫して自分の武器を身につけられるような環境をつくり指導していきたいと感じた。

結びになりますが、このような貴重な機会を与えて下さったコーチングスクール関係者の皆様に感謝申し上げます。